

# 災害後再定住集落の住宅増改築に関する調査研究 - 台湾ハオチャ民族のリナリ集落を事例として

蔡松倫

キーワード：再定住、災害復興、増改築、台風モロッコ、台湾

近年地球温暖化など様々な気候変動によって、異常気象による巨大自然災害が続々と生じ、台湾でも大きな影響がある。台湾気象庁によると、最近 20 年間水害が頻繁に発生し、特に 2009 年の台風モロッコによる水害は、ほぼ台湾南部全域が浸水範囲となり、台湾において前代未聞の巨大災害となった。台湾政府は災害直後に台風モロッコ再建委員会を結成し、台湾南部の被災地における被害を調査し、居住できない地域を決めて、計 3000 以上の世帯が 17 の新しい集落に移住し、彼らには恒久住宅が提供された。その半分は、台湾の少数民族である。本研究の調査地はその一つのリナリ集落です。総計 476 世帯がリナリ集落に移住し、そのうち少数民族のハオチャ人は 177 世帯であるという。研究の目的は再建集落の増改築の実態、機能、特徴を明らかにすることであり、文献収集、家屋の実測調査、聞き取り調査を行った。

ハオチャ集落の住民は、台湾南部の少数民族ルカイに属する下位集団である。本来、ハオチャ人は旧ハオチャ集落に住んでいたが、政府の政策によって、1977 年に新ハオチャ集落に移住させられた。しかし、2009 年モロッコ台風で集落全体が土砂災害で埋まる被害がでたため、3 年間の仮設住宅生活を経て、2010 年にリナリに移住した。リナリ集落は NGO による再建プロセスで建設された集落である。NGO と住民合意形成した上、再建された恒久住宅である。恒久住宅の間取りは 1 世帯タイプと 2 世帯タイプがあり、床面積は 105.6 m<sup>2</sup> (1 世帯当り) である。

聞き取り調査の結果によると、台風モロッコによる再建はトップダウンの体制と時間不足のため、NGO、政府、住民らがうまくコミュニケーションがとられていなかったということと新しい再建集落についての評価が明らかにした。増改築調査の結果によると、時間の経過とともに増改築の面積が増加していることが明らかになった。さらに、敷地が狭いため、多くの住宅で、階数を増やすような増改築も見られた。28 世帯の実測調査によると、第一に内部改築（リノベーション）がある世帯は、増改築機能数も多い。第二に居住人数が多い世帯ほど、増改築面積も広いという傾向がみられた。第三に、増改築面積が広い世帯は、増改築機能数が多い傾向がみられるという三つの正の相関関係がわかった。それぞれの増改築パターンを分析してみると、一つ目は背面のみの増改築である。そのような増改築はほぼ生活空間の拡張のために行われている。二つ目は側面と背面両方の増改築である。側面は、車庫、作業スペース、接客スペース、宿泊室など、非生活空間が多い。三つ目は内部の増改築である。内部の増改築はだいたい台所から作業スペースに変更し、生産活動の空間になるということが分かった。さらに、ハオチャ人は昔農業社会だったため、農用倉庫と台所の増改築が最も多いことが分かった。台湾においての災害復興の集落再建プロセスはいまだ発展途上であり、本研究によって、居住環境向上のための手法確立が望まれていることを示した。どうすれば迅速な再建と文化継承を両立できるのか。これから台湾の再建政策において、解決しなければいけない課題である。